

# Art Insight Kagawa

廃材を使った「遊べるアート」を紹介している芸術士のリサイクルアート展 高松市西宝町、環境保全推進課分室



## 廃材アートに変身

芸術を通じて子どもの感性を育む。そんなコンセプトが話題の高松市の芸術士派遣事業。4年目の今夏、芸術士たちが活動テーマの一つに掲げるリサイクルアートの展示会を開いている。廃材の造形作品を紹介する内容だが、単に展示するだけではない。来場者が手に取り、自由に遊んでもらおうという試みだ。

「できたよー」。会場に黄色い歓声が響く。布地のロールの芯だった紙筒が並ぶ一角。男の子が座り込み、芸術士の女性と一緒に筒で何かを作っている。完成したら次を作り、また次を作る。昼ご飯の時間もとくに過ぎていくのに、時間を忘れて夢中になっている。

昨年冬、芸術士たちはアートの重要な要素でもある「素材」に着目し始めた。そこに現代的なテーマの「エコロジー」を絡ませたのがリサイクルアート。以降、地域の縫製工場や店から不要になった廃材を提供してもら

### 高松市の芸術士12人「遊び、学ぶ」作品を提案

い、それらを使った立体作品の創作にかかった。

芸術士派遣事業は戦後にイタリアで開始された幼児教育がヒント。画家や彫刻家が保育所や幼稚園で週1、2回の授業を行い、絵を描いたり音を鳴らしたりすることで創造性や自主性を培う。日本では自治体が主体になって実施するのは高松市が初めてで、現在、25施設に計12人を派遣する。

展示は3作を中心に構成した。直径7〜8センチ、長さ1メートルの紙筒を200本ほど集めたドーム、数百個のミシン用の糸巻

きの芯で組み立てた塔、靴下の端切れを網状に編んだ幕。中に入ったり、一部を壊して作り直したり…。子どもたちは汗だくになって遊んでいる。12人は個展やグループ展で自分の表現を問うアーティストだ。だから廃材が材料でも、もっと緊張感のある作品に仕上げることができる。しかし今回、あえて楽しい「お

もちゃ」の制作に取り組むことで、子どもたちが肌で素材に触れ、体でエゴを学ぶ場を提供した。

会期中は芸術士によるワークショップが次々に用意され、18日にはワインのコルクで人形を作る講座があった。シールやピンをくっつけ、無表情なコルクを愛らしいキャラクターに変身させる。そんな素材の面白さを五感で味わう展示会。エコとアートの喜びを知る創造のワンダーランドだ。

来月23日まで展示



ワークショップで作ったワインのコルクの人形

展示会は高松市西宝町の環境保全推進課分室で9月23日まで。入場無料。ワークショップは9月15日も開き、自給自足の生活に取り組む陶芸家の秋山陣を囲むトークイベント(午前10時から、500円)と、全国で人形劇の公演を行ってきた白沢知里の講座(午後1時から、300円)を設ける。問い合わせはアーキペラゴ、電話0877(811)7707。